



2020 フィールド Vol.1 スタディ カタログ

2019年度 I 期（夏休み）に実施したフィールドスタディを
収録しています。



法 政 大 学
人 間 環 境 学 部



「障がい者福祉の体験」

担当教員 朝比奈茂 宮川路子

コース概要

日程 2019年8月1日～17日

場所 群馬県安中市松井田町 ゆきわりそう山荘

参加人数 20名

コースのねらい

障がい者と合宿を通じて寝食および行動をともにすることで、人間としての生き方を実感します。また福祉活動における仕事内容、それに携わっている方々と意見交換をすることで、現在の福祉環境について理解を深めます。

内容

本フィールドスタディは、1999年学部創設以来、現在まで行われてきたロングラン・プログラムであり、「人間」について深く考えることの出来るプログラムの一つです。豊島区南長崎に所在する「ゆきわりそうグループ (<http://www.yukiwari.org/top.htm>)」の理念に共感し、互いに理解しあいながらここまで歩んできました。

人間の成長段階における最終章となる大学生の時期に、障がい者に関する知識や情報をほとんど持たない状況で、同じ人間であるのにあまりにも違う生き方をしている障がい者の方々と、寝食をともにする「合宿形式」で過ごすことにより、「人間について深く考える体験が出来た」と、これまで参加したOB・OGの方々が述べております。普段私たちは、自分の意志によって行動を決定し、自由に日常生活をおくることができます。これは当たり前なのですが、そうでない人が世の中大勢いることを、このフィールドスタディを通じて身体全体で感じ得るプログラムであると実感致します。



写真1 マラソン教室 靴紐を結ぶスタッフ



写真2 マラソン教室 障がい者と一緒に走る学生



写真3 ゆきわりそう施設内にある乗馬施設



写真4 障がい者と一緒にお茶を飲む学生

学習を終えて（参加学生の報告書より）

障がい者の方々と生活をして、普段経験できない体験ができました。障がい者の方々も私たちが思っているより自分で行動できるし、思いを伝えることができることがわかりました。私の中にあつた障がい者の方に対する固定観念が変わりました。私たちより優れた能力を持っていて、なんと言っても心が綺麗で無邪気でした。一緒にいて楽しかったです。たくさん大変な思いをしましたが、最後のミーティングで「利用者さんの両親は365日24時間見守っているのだよ」という言葉に納得し、少しは両親の方々が休める手だすけが出来たのかな、と思います。今回この経験は特に夢がなかった私に気づきをくれました。将来は、身体的、精神的に弱く困っている人が喜ぶ、役に立つ道具や物を作ったり、提供できたりするような仕事に就き、いつか経営できる人間になりたいと思いました。今回このような体験をさせて頂いたスタッフをはじめ、ご両親に感謝申し上げます。有難うございました。（3年 男子学生）

この3日間が始まる前は、とても緊張していたし、普段、障がい者の方々と関わる機会がなかったので、不安でいっぱいだった。正直、この3日間が楽しい思い出ばかりでなく、辛い思いもしたことも多々あった。「どんな言葉をかけたら良いか」、「私の支援は間違っているのか」、「どうしたら伝わるのか」など様々なことを考えた。なんとか相手に理解してもらえるように、自分なりに工夫して伝えたり、消極的な私でも積極的に話しかけていくと、喜んでくれることもあつたし、障がい者の方はきちんと私に伝えてくれた。最終日にはお別れをするのが寂しかったほど、楽しむことができたし、解放感もあつたが記憶に残る体験ができた。またスタッフの方々の姿を見ていると、疲れた姿を一切みせず笑顔で過ごしていたので、私も見習わなければいけない、と感じた。辛いことが多くある中で、笑顔と一緒に作業したり、会話をしたりすることが出来た時は、心から嬉しく、その時のことを今でも覚えている。普段当たり前に出来ていることは、障がい者の方々からしたら、当たり前ではない。障がい者の方々も私たちと同じ人間であるので、今後はこの経験をいかしてできることは進んで役に立ちたいと思う。（2年 女子学生）

「陸・海・空・宇の交通運輸を支える」

担当教員 北川徹哉

コース概要

日程 2019年8月27日～30日

場所 東京都、千葉県、茨城県

参加人数 25名

コースのねらい

社会と経済の基幹である陸上、海上、航空の交通運輸を支える現場、そして地上と宇宙とを結ぶ重要施設を訪れます。業務の魅力と重責を肌で感じましょう。

内容

行程1日目は、成田国際空港を訪れ、2名のガイドさんの案内で視察しました。学生は、第一ターミナルの屋上で滑走路全体を見わたしながら聞いた説明の中で、滑走路や誘導路の識別記号番号の意味が印象に残ったようです。国際空港ならではの各国の文化に配慮された施設にも感銘を受けていました。空海の業務の多くを学ぶことができ、また、成田国際空港の建設の闘争の爪痕を見ることもできました。第一と第二のターミナルを徒歩とバスで回ったので、学生はヘトヘトになっていました。

行程2日目は羽田空港の一面にある日本航空機体整備工場を訪問しました。巨大なドックに入ると複数の機体が整備中でした。整備士の方々が旅客機の各部で慎重に作業をしており、安全で円滑な運航と乗客の命にかかわる重責が伝わってきました。旅客機をこれほど近くで見る機会はありません。また、ジェットエンジンが整備されていたり、すぐ外の滑走路では旅客機が離発着し、迫力満点でした。



成田国際空港を視察



客の命にかかわる重責が伝わってきました。旅客機をこれほど近くで見る機会はありません。また、ジェットエンジンが整備されていたり、すぐ外の滑走路では旅客機が離発着し、迫力満点でした。



日本航空機体整備工場を訪問



行程3日目は、まず東京税関本関を訪問しました。税関の歴





東京税関本関を訪問



ヤマト運輸・羽田クロノゲートを見学



筑波宇宙センターを訪問

史や使命について説明いただき、円滑な海上・航空貿易を担っていることを知りました。また、違法な物品を取り締まるための探知機を見学させていただき、税関が安心して安全な日本の社会の実現を担っていることを実感しました。多くの学生さんが職員の方に質問していたのが印象的でした。東京税関本関を後にして直ちに、ヤマト運輸の羽田クロノゲートを訪れました。クロネコヤマト宅急便の国内・国際拠点であり、膨大な数の荷物が途切れることなく流れ、レーザー光がきらめく中、多様なセンサーとコンピュータ制御によって仕分けされてゆく様子はいつまで眺めていても飽きないと思うほどでした。また、近年の宅配便の発達、ならびに更なる付加価値の創造へ向けた事業展開も学ぶことができました。職員の方はとても丁寧に案内くださり、学生は楽しんでいました。

行程 4 日目は筑波宇宙センターを訪れ、敷地内をバスで移動しながら見学しました。国際宇宙ステーションでの生活を想定した閉鎖環境や低圧環境への宇宙飛行士の適応訓練設備などを見ることができました。とくに、国際宇宙ステーションの一部である「きぼう」の運用管制室では、今この瞬間の国際宇宙ステーションの様子が映し出されている大きなスクリーンとコンピュータ群に学生は圧倒されていました。地上から 24 時間体制で「きぼう」の運用を支えている管制官の働きぶりを見ることができ、本当に感動的でした。また、運用管制室の撮影は一切禁止されているため、スマホやカメラなどは事前に一旦預けることが義務づけられ、宇宙開発は機密の塊であるということも実感しました。

学習を終えて

「海外旅行に行くときくらいしか税関を意識しませんでした。とても重大な役割を果していて、日本を護っているのだと知りました。」(1年女性) / 「羽田クロノゲートでは設備が想像よりもはるかにハイテクで驚きました。」(2年女性) / 「今までの人生で最も近くで航空機を見ることができ、非常に興奮しました。」(3年男性) / 「宇宙飛行士になるには英語力や体力が必要だろうとは思っていましたが、協調性がとても大切だと知り驚きました。」(1年女性) / 「将来宇宙へ旅行することが普通になる日がくるかもしれない。そんな日が待ち遠しくなるような1日でした。」(1年男性)

「国立公園の魅力とそれを支える地域活動」

担当教員 高田雅之

コース概要

日程 2019年9月2日～6日

場所 北海道：利尻礼文サロベツ国立公園

参加人数 29名

コースのねらい

国立公園の優れた自然にふれるとともに、NPO活動などによる保全や、産業振興との共生に取り組む人々の活動現場を訪ね、自然の魅力を支える地域社会の在り方について学びます。また稚内市の自然エネルギーの現場を訪ねて自然との関わりを考えます。

内容

サロベツ湿原地域

初日はまず、日本最北の国立公園「利尻礼文サロベツ国立公園」の中のサロベツ湿原を訪ねました。活動の中核施設であるサロベツ湿原センターでNPOサロベツ・エコ・ネットワークの方のお話を聞いて、サロベツの自然やNPO活動、地域の人々との関わりについて学びました。またサロベツ湿原の木道を散策しながら、かつての泥炭の採掘跡地や、地平線が見える日本最大の高層湿原の雄大さを体感しました。夜は豊富町営大規模草地農場で星空を見上げ、天の川と流れ星を観察しました。

2日目は、豊富町牛乳公社で酪農業の生産物である牛乳やヨーグルトを製造する工場を見学の後、海岸に沿って連なる長大な海岸砂丘林内を散策しました。そして失われた海岸林を再生する植林用のミズナラ（ドングリ）を育てる苗畑で草むしり活動に汗を流し、実際の植林再生地の見学をしました。午後は山本牧場に酪農の現場を訪ね、湿原と農地との共存の取り組みについて学びました。次いでサロベツ湿原センターで環境省の自然保護官から国立公園の管理や課題についての講話を聞いた後、牧草地を歩いて湿原の自然再生の現場を案内していただきました。夜は豊富温泉の宿で事前学習の成果をNPOの方に見ていただき、意見交換を行いました。

利尻島地域

3日目はノシャップ岬をまわって稚内から船で利尻島を訪ねました。神居海岸パークで観光体験プログラムのひとつであるウニ採り体験をし、自分でさばいたウニを軍艦巻きにして舌鼓を打ちました。そして観光協会の方に島の自然資源を観光や地域づくりに生かす取り組みについてお話をいただき、有意義な意見交換を行いました。続いて街中に残された古い建物と倉を生かした「島の駅」を訪ね、アートや文化の視点から地域づくりに取り組む活動について学



写真1 植林用の苗畑の手入れを行う(サロベツ)



写真2 環境省自然保護官より自然再生について説明(サロベツ)

びました。夕方は溶岩が所々むき出しになった杓形の岬公園を散策し、海に沈む夕日を見ることができました。夜はホテルで自然ガイドの方による利尻の自然と暮らしについてのお話を聞いた後、前夜に続いて事前学習の発表会を行いました。

4日目は種富湿原で外来種オオハンゴンソウの駆除体験を行い、道具を使って根から掘り取ることの難しさを実感しました。次に島の経済を支えるウニ種苗センターを見学し、北麓野営場から利尻山の登山道を甘露泉水まで歩き、自然観察をしながら登山道の浸食問題やトイレ問題、外来種持ち込み防止などを現場で学びました。続いて利尻を代表する景勝地である姫沼、オタドマリ沼、南浜湿原を訪ね、美しい景観とそれを構成する植物や水辺に触れました。仙法志御崎公園でアザラシを見たのち、利尻町立博物館を訪ねて施設を見学し学芸員の方から地域の自然を知り資料を保存することの大切さについて学びました。

夜はホテルで外来種問題、風車と景観の二つのテーマでレクチャーを行い、グループに分かれて討論を行いました。

稚内地域

最終日の5日目は、自然エネルギーをテーマに稚内のメガソーラーと宗谷岬ウインドファーム（風車）を見学し、サロベツや利尻で学んだ風車と景観について現場で考えました。日本最北の宗谷岬の地に立ち、自然資源の豊かな道北の旅のしめくくりとして、宗谷丘陵フットパスコースのひとつ「白い道」を散策し北海道を後にしました。

このコースの目指すところは、国立公園の最前線で活動する様々な方のお話を聞き、自然と人との「軋轢の姿」と「共生の姿」を自分の目で見出し、自然の保護と恵みの享受について考えることです。豊かな自然の地域にも多くの方が暮らしていて、地域との関わりなしに自然は守れないことを実感し、新しい発見と忘れ難い経験が得られたのではないのでしょうか。

学習を終えて

「迷ったら前へ進め」

私は今回のフィールドスタディで実際に現地を訪れて自分自身で経験する事の大切さを学びました。湿原での特定外来生物のオオハンゴンソウの駆除作業では、外来種が増殖する問題の脅威を再認識する事が出来ました。実際に体験する事によって、座学では学ぶ事の出来ない貴重な経験が出来たと思っています。関係者の皆さんがこの地域の魅力を楽しそうに語っておられ、自然と人間の共生が出来ている素晴らしい場所だと思いました。サロベツ湿原センターの嶋崎さんの「迷ったら前へ進め」という言葉はとても印象深く残っています。これからの人生の教訓にしていきたいです。(2年 山田智之)

「交流を通して学ぶまちづくり」

風車が林立している様子を見て、最初は非日常的な風景でただただ美しいものだと感じていた。しかし現地に行き、住民の方が利尻富士を望む景観が損なわれてる恐れがあるため建設に反対しているという事実を知った。そして改めて風車を見ると純粹に美しいという思いでは見られなくなった。住民の方のお話を聞いたことで私の価値観は変わった。このFSでは他にもNPOや行政の方と交流する機会もある。こうしたさまざまな立場の方との交流を通して、まちづくりの難しさや大切さを肌で感じる事ができたことはとても刺激的であった。このFSで今後さらに地方におけるまちづくりについて学びたいと思った。(1年 島村亜咲子)



写真3 自分で採ったウニをさばいて軍艦巻に(利尻)



写真4 外来種オオハンゴンソウの引き抜き作業(利尻)

「文化継承と文学的表象のあり方とは？ ——金沢の街並み保存と石川県の風景表象・文化」

担当教員 竹本 研史

コース概要

日程 2019年9月10日～13日

場所 石川県金沢市・輪島市

参加人数 10名

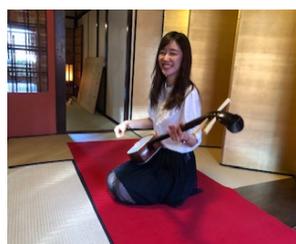
ついて、①金沢の街並み保存や職人の技術の継承に関する取り組みを学ぶこと、②現実の金沢の風景を確認し、文学作品による表象との差異を踏まえて、文字芸術の可能性を問い直すこと、③《伝統と暮らし》をテーマに、能登半島の自然と文化を捉えること、以上を目的としています。

コースのねらい

芸術文化が花開く金沢。雄大な自然に育まれた能登。本コースは、両者が抱えている文化継承の課題に

内容

初日は、金沢の三大文豪である泉鏡花、徳田秋聲らの作品舞台となった、浅野川流域を散策し、事前学習で分析した文学作品による表象と、自分たちが目にしている風景との差異について検討することによって理解を深めました。金沢の代表的な観光スポットでもある「ひがし茶屋街」では、1820年の創業以来、そのままの形を残す「志摩」でスタッフの方から解説を聞きました。徳田秋聲記念館では、学芸員の方に、徳田秋聲とその文学作品の全体像、ならびに文学館が抱える課題についてレクチャーを受けました。



「志摩」でスタッフの方に教わりながら三味線をひいてみる学生たち。

2日目の午前、金沢21世紀美術館で美術館の総務課の方に概要を学んだ後、美術館を見学しました。とかく伝統文化が喧伝される金沢ですが、現代美術を取り込んでいくことで、伝統の革新と未来のための文化創造を行っている新たな側面を発見しました。午後は、兼六園と妙立寺を訪れました。兼六園では、文人たちが取り上げた場所を中心に回りながら、それぞれの作品の描写をそれらに重ねました。特異な建築構造をもつ妙立寺では、幻想的な内容として知られる吉田健一『金沢』の舞台の1つとして選ばれた必然性について、文字通り体感を通じて考察を深めることができました。

兼六園の霞ヶ池の前にて



3日目の午前中は、「金澤町家研究会」のメンバーの方々のご案内で金沢町家が数多く残る地域を歩きました。金沢町家の構造、保存方法、そして現代生活と保存の両立の取り組みを学びました。午後は、金沢職人大学校と金沢市民芸術村を訪問しました。職人大学校では、伝統文化を継承していくにあたって不可欠な職人の技術向上をどのようにカリキュラムとして行っているのか、お話を伺いました。また、市民芸術村では、村長さんのお話から、文化によるまちづくりの意義を市民に理解してもらうためには、市民が文化の当事者になることが何よりも重要であることを、新たな知見として得ることができました。



「金澤町家研究会」の先生方のご案内で金澤町家を探訪。



塩田で、海水の入った桶を両肩で抱えてその重さを実感。

4日目は、能登半島の輪島市に移動して、「伝統と暮らし」の文化をテーマに学習しました。午前中は、白米千枚田と輪島塩を見学しました。白米千枚田では、海に望む圧倒的な景観に驚嘆しながらも、その背後に隠れる農業の持続可能性をめぐる問題を確認しました。輪島塩では、浜士の方から伝統的な揚浜式塩田と塩づくりについて説明を受けました。午後は、石川県漆芸美術館を訪れ、学芸員の方から漆芸の歴史や工法を学ぶとともに、作品について解説していただきながら、同時に輪島塗における伝統継承の困難さを伺いました。

学習を終えて

「金沢の抱えている問題や現状などを知り、観光地の金沢とは違う部分を見ることができました。伝統や文化を残すためにたくさんの方がどんな思いをもって、関わっているのかを知ることが出来てとても良かったです。また、事前学習で読んだ文学作品のモデルになっている場所をいくつか訪れました。想像した景色とは違ったりすることも面白かったですし、そのシーンが本当に見えてきてすごくわくわくすることもありました。事前学習で本を読んでいたからこそ、見えた景色だったと思います」（2年 奥田 結希乃）。

「私は今まで金沢市という町に対して有名観光地という印象しか抱いていませんでしたが、このFSに参加したことで金沢の良さに触れつつ、その裏にある課題や、町に魅力を持たせ続けるための人々の努力を知ることができました。今回のFSは自分にとって新たな視点から1つの町を眺めることができる本当に良い機会でしたし、これからの自分が何を学んでいくべきか考えさせられるとても有意義な時間を過ごすことができましたと思います」（1年 松澤 みずき）。

「科学博物館で学ぶ」

担当教員 谷本 勉

コース概要

日程 2019年8月～9月

場所 関東地方の科学博物館等

参加人数 30名

コースのねらい

科学博物館を、環境問題等を学ぶための大学外の現場（フィールド）として自在に使いこなし、生涯学習の場となるようにすることを目的とします。

内容

「科学博物館で学ぶ」は、グループ学習ではなく、個人参加を原則とします。参加者がそれぞれ立案した計画に従って学習していきます。具体的には、各地の科学博物館等でどのような参加型の企画・セミナーが行われているかを調べ、参加するイベントを決定し、学習していきます。

例年6月中旬の土曜日の午後、最初の説明会を行います。ここで詳細な実施要領を解説します。その後、できるだけ夏期休暇に入る前に事前学習として担当教員と相談しながら、参加する学習内容についての理解を深めて、学習計画書を作成します。

学習計画に際しては、1つのテーマが4時間以上のものを1日分の学習として認め、それ以下のものを半日分として、合計4日分の学習をすることを義務づけています。多くの場合8月中の土・日を何度か使うことになり、夏期休暇の各自の過ごし方の中にきちんと学習計画を組み込んでおくことが特に重要になります。

今年の主な参加企画には次のようなものがあります。

8月2日「国立科学博物館」：学習のテーマ「銚子沖に生息するスナメリ観察会」

8月3日「国立科学博物館附属自然教育園」：学習のテーマ「大学生のための菌類学入門」

8月3、10日「千葉県立中央博物館」：学習のテーマ「化石の模型を作ろう（1）（2）」

8月18日「国立科学博物館筑波実験植物園」：学習のテーマ「ミャンマーの水草から日本の水草の起源を探る」

8月22日「千葉県立中央博物館」：学習のテーマ「たてものの中の化石を探そう」

8月31日「千葉県立中央博物館」：学習のテーマ「古脊椎動物学入門」

9月7日「栃木県立博物館」：学習のテーマ「カレーに変身！米物語～土ってすごイネ～」

9月8日「神奈川県立生命の星・地球博物館」：学習のテーマ「きのこの観察と同定」

学習を終えて

[銚子沖に生息するスナメリ観察会]に参加して

スナメリの生息地や、ストランディングについて学ぶ。ストランディングの原因として、私達人間が関わっている件も多い。大学でも学んだ海岸のごみが非常に多いことについて改めて対策が必要であること、またその海岸のごみは川からのものが多いことを初めて知った。

ストランディングしたスナメリやその他の種について、死亡個体を捨ててしまうのではなく資料として使うことで、これからの研究に役立てることが出来る。実際に海からスナメリを観察し自然に触れたことで、改めて保護について考えた。人間が手を加え保護するというよりも、人間が自然に干渉して数を減らしていること、そしてそれを皆が知り考えなければならぬと感じた。スナメリ以外の種についても、同じことが言える。

私達人間と動物との共生、干渉について、まずは理解することが必要だと感じた。私自身自然と触れた経験も乏しく実感が無かったが、実際に自然と触れ合うことで、それらの恩恵や暮らしについて改めて考えることが出来るのだと思う。このイベントのように、自然を身近に感じることは勉強以外でもそして誰にでも重要な経験になると感じた。



写真1 乗船した船

[たてものの中の化石を探そう]に参加して

このアンモナイトの化石はとてもきれいにすぐに見つけることができました。以前のイベントでレプリカを作ったアンモナイトのサイズと同じくらいだったので中生代のアンモナイトだとすぐわかりました。化石というのはどこか山奥まで行き、石などを削ってでもしないと発見できないようなものだと思っていましたが、そんなことはなく、街の中というとても身近な場所でも見つけられるのだと知ることができました。



写真2 千葉市内のデパートのアンモナイト

[化石の模型を作ろう]に参加して

化石の模型をつくる機会は今後中々訪れないのでとてもよい時間をすごせた。自分の手で化石の形を作り上げることで細かい部分に注目することができた。模型は実物と同等の形をしたものでありながら壊してしまってももう一度作ることができる代物だということが理解できた。様々な体験をしないと世の中の知識が身につかないことに気づいたので博物館に自ら足を運ぶことは今までなかったが今後様々な博物館を訪れていこうと思った。



写真3 上が本物で下が模型

「行政（警察・防衛・公安関係）による 生活と安全の確保」

担当教員 永野秀雄 長谷川直哉

コース概要

日程 2019年8月5日～8日

場所 公安調査庁、神奈川県警察本部、神奈川県警察・横浜水上警察署、神奈川県警察・航空隊（横浜ヘリポート）、神奈川県警察・警察学校、海上自衛隊横須賀基地、防衛大学校

参加人数 15名

コースのねらい

国民の生活と安全を守る組織としての警察・防衛・公安関係の組織と現場を見学して、その現状を学ぶことにあります。将来、警察官、自衛官、公安調査官を志望する学生や、この分野に関心のある学生に参加してもらいたいと考えました。

内容

第1日目の午前中は、公安調査庁において、同庁の業務・組織の説明と、横尾総務部長からのお話を頂きました。午後は、4人1チームで、情報収集に関する調査業務を体験させて頂きました。架空の国家の関係者が東京オリンピックでテロを起こす可能性があるのかを、複数の関係者にインタビューするというもので、調査官が担当する業務の難しさを実感することができました。

第2日目の午前中は、神奈川県警察本部において、指紋採取の鑑識体験をさせて頂いた後、通信指令室と交通管制センターを見学しました。午後は、横浜水上警察署にて、業務を説明して頂いた後、2班に



公安調査庁・調査業務体験



神奈川県警察・横浜水上警察署

分かれて船舶に乗船し、横浜港を見て回る機会に恵まれました。また、警察装備品の装着を体験しました。

第3日目の午前中は、横浜ヘリポートの神奈川県警察・航空隊において、同隊の業務につき説明を受けた後、実際にヘリコプターを使ったホイスト救助訓練を見せて頂きました。



神奈川県警察・航空隊（横浜ヘリポート）



海上自衛隊横須賀基地・護衛艦「いかづち」

第3日目の午後は、神奈川県警察・警察学校において、神奈川県警察の採用制度と同校に関する説明を受けた後、学生寮、食堂、柔剣道場における武道訓練、交番における職務質問訓練、忠烈塔を見学させて頂きました。

第4日目の午前中は、海上自衛隊横須賀基地において、海上自衛隊の組織・役割について説明を受けた後、護衛艦「いかづち」に乗船し、船上・船内の各所において、搭載火器等の説明をして頂きました。また、昼食は、基地の食堂で「海軍カレー」を頂きました。

第4日目の午後は、防衛大学校において、まず防衛大学校資料館において、同校の紹介ビデオを見た後、歴史展示物等を見学しました。この後、巨大な総合情報図書館を見学しました。最後に、人文社会科学群国際関係学科で国際法などを担当されている黒崎将広准教授から、同校の教育内容や、なぜ国際法が同校の必修科目となっているか等につき説明して頂きました。

学習を終えて

公安調査官疑似体験ツアーで、私たちはこの調査業務を体験することができた。情報を持っていると思われる人から、どのように情報を引き出すか、どうしたら信頼が得られるのかを考えながら面談を進めていくのは大変難しく、体力を使うものであった。調査業務体験を終えた後、改めて実際に現場で人に会っている調査官の人の勇気や使命感に対して、尊敬せざるを得なかった。(1年 森市優)

私は将来、警察官になりたいと思って、このフィールド・スタディに応募して、ほかではできない体験をできたと思いました。この体験を通して、改めて警察官になりたいと思いました。(3年 伊奈晃宏)

護衛艦の体験は4日間の中で最も興奮した時であると同時に、最も緊張した雰囲気を感じた場所でもあった。台風の時には護衛艦は遠くへ退避させるという話で、台風の経路などを考慮しながらあれだけの大きさの船をいくつも移動させるというのは非常に大変なことだと思った。(2年 高砂麻里)

「歴史的環境保全のまちづくりを学ぶ」

担当教員 根崎光男

コース概要

日程 2019年9月4日～7日

場所 東京都中央区、神奈川県箱根町、静岡県三島市

参加人数 21名

コースのねらい

先人の営みや文化が刻まれた文化財や文化的景観などは、有限の歴史資源ですが、現代社会の利便性や効率性の追求、そして人々の生活様式の変化によって、その保全が難しくなり、その維持さえ困難になりつつあります。

そこで、本コースでは当該地域に残る史跡や建造物、文化的景観などの歴史的環境を保全・活用していくための取り組みとその課題を学び、それらがまちづくりに果たす役割を考えることを目的としています。

内容

本コースは、日帰りコースと2泊3日の宿泊コースから成り立っています。前者は東京湾に面して徳川将軍家の別荘から天皇家の離宮となった浜離宮恩賜庭園、後者は旧東海道に位置づく小田原城、箱根関所、旧街道石畳・杉並木・一里塚、三島大社を訪ね、その保全の実情を見てきました。いずれも、国内有数の観光地であり、かつ歴史資源の活用とまちづくりの取り組みとを学べる恰好の地域でもあります。それらの現場に行って、直接、担当者の方からその現状と課題について話をうかがうことで、今後の学習に役立てられるように配慮しています。



写真1 旧東海道石畳の中間地点でホッと一息



写真2 浜離宮恩賜庭園の説明を聞く



写真 3 浜離宮恩賜庭園の御亭山に登る



写真 4 箱根町役場で講義を受ける



写真 5 急峻な旧東海道石畳を歩く



写真 6 箱根関所の説明を聞く

学習を終えて

私が今回の箱根 FS に参加して考えたことは、自治体による文化的景観の保全が活用と表裏一体であるということでした。文化財や文化的景観を保存・保全していくためには、資金が必要です。そのためには、観光客を呼び込むための文化財・文化的景観を活用した政策を推進していく必要がありますが、まず誘致のための資金が必要であり、保全に回す資金との間でバランスを考える必要があります。保全と活用にそれぞれどれだけの資金を回すのか、その調整をすることが自治体のとても大事な仕事だと思いました。箱根町の担当職員のお話を聞くことで、このことがより理解できたと思います。未来に日本文化を残していくためにも、この問題について考えていきたいと思いました。(3年 河合 亮)

今回は実際に箱根町の石畳や杉並木を歩きました。普段の観光ではそう簡単に「行こう」とはならない場所に足を踏み入れ、「文化財の保全は同じ道路でも、その場所によって管理する人が違い、それにより現状に差がある」というお話を聞くだけでは、何となく察することしか出来ない事も、実際に訪れてみて、どの位の差があるのか、どの様に違っているのかを具体的に把握し考えることができました。また、じっくりお話を伺う事が難しい職員の方に講義をしていただいたり、滅多に入れない関所の建物の奥に通していただけた事は、歴史が好きな私にとって心躍る体験となりました。(2年 松下ことみ)

「ビジネスストーリーから学ぶ

SDGs（別子銅山・倉敷）」

担当教員 長谷川直哉 竹原正篤

コース概要

日程 2019年9月9日～12日

場所 愛媛県松山市・新居浜市別子銅山、岡山県倉敷市倉敷紡績関係施設

参加人数 22名

コースのねらい

愛媛県新居浜市の別子銅山（住友財閥）と岡山県倉敷市の倉敷紡績関係施設を訪問し、日本版 CSR の第一人者といわれる伊庭貞剛・鈴木馬左也（住友財閥）と大原孫三郎・總一郎親子（倉敷紡績・クラレ）が実践した SDGs 経営の歴史をたどる。彼らの経営を通じて、現代における企業経営のあり方を考える。

内容

1日目

松山市内にて現地集合後、坂の上の雲ミュージアムと道後温泉本館を見学しました。坂の上の雲ミュージアムは、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』をテーマにまちづくりの中核施設として誕生した施設です。小説『坂の上の雲』には、近代国家形成期である明治期に世界や日本で起きた出来事、正岡子規や夏目漱石など松山にゆかりの深い人びとの人生が描かれ、現代を生きる私たちに大きな示唆を与えてくれます。夜は、金融機関の松山支店で活躍している長谷川研究会の OG も参加し、松山の地元料理を堪能しながら参加メンバー間の交流を深めました。

2日目

バスで新居浜市に移動し、住友財閥によって開発された別子銅山跡を見学しました。別子銅山は、1690年（元禄3年）に発見され、以来、1973年（昭和48年）に閉山するまで283年にわたり、銅を産出し日本の近代化に貢献しました。しかし、銅の製錬過程から生じる亜硫酸ガスによって農作物が被害を受け、足尾銅山（栃木県）と並んで、日本の初の産業公害を発生させました。煙害問題の解決にあたった当時の住友財閥の経営者は、植林など自然環境の復元にも心血を注ぎ、企業の社会的責任の先駆者とも言われています。足尾銅山の鉱害を追及していた田中正造も、別子銅山を「我が国銅山の模範」と評しています。

3日目

鉄道で瀬戸大橋を経由して松山から倉敷に移動し、法政大学にもゆかりの深い大原孫三郎が経営した倉敷紡績工場跡や CSR（Corporate Social



写真1 別子銅山遺跡

Responsibility : 企業の社会的責任) 活動の一環として設立された倉敷中央病院を訪問しました。大原孫三郎は、倉敷紡績 (クラボウ)、倉敷絹織 (現在のクラレ) 中国合同銀行 (中国銀行の前身)、中国水力電気会社 (中国電力の前身) の社長を務めた人物です。大原は CSR 活動にも熱心に取り組み、倉敷中央病院、大原美術館、大原社会問題研究所 (現・法政大学大原社会問題研究所) を設立しました。倉敷中央病院では、相田副理事長から病院の沿革と現在の役割についてレクチャーを受け、明治期に欧州から購入した貴重な医学書や院内に憩いと潤いを与える美術品やアトリウムを見学し、病院らしくない病院の建設を目指した大原孫三郎の思いを体感しました。また、第二次世界大戦の戦災を免れた倉敷美観地区を散策し、江戸～昭和の建物が保存された町並みを楽しみました。

4 日目

大原美術館の学芸員からレクチャーを受けた後、日本初の西洋美術館として設立された大原美術館の収蔵品を時間の許す限り鑑賞しました。大原美術館には、エル・グレコの名品「受胎告知」をはじめ、モネの「睡蓮」など印象派から現代に至る西欧美術の代表作と、明治期以降の日本の近代美術の名画が揃っています。CSR 活動に積極的に取り組んだ大原孫三郎自身が「私の一番の最高傑作」と言って憚らなかった大原美術館を見学し、企業の社会的責任について参加者それぞれが考える時間を持つことができました。午後、倉敷駅にて解散し各自帰路につきました。

学習を終えて

私は倉敷中央病院を訪問し、現在では当たり前のように思える病院の整った設備環境や従業員の働く環境を、CSR という言葉がない時代に生きていた 90 年以上前の経営者が自らの私財で作上げた事に驚きました。大原孫三郎の経営者としての能力と事業を通じて獲得した資本を地域社会のために投資していく姿勢に感銘を受けました。大原孫三郎については、ビジネスヒストリーの授業で学びましたが、現地を訪れて経済価値と社会価値の両立を目指した経営が現代社会に生きていることを実感しました。現代企業も SDGs を通じて、大原孫三郎のような経営を実践して欲しいと思います。(3 年生)

フィールドスタディで初めて松山と倉敷を訪れて、日常生活では絶対にできない貴重な体験をたくさんすることができました。首都圏以外に住んだ経験のない私は、地域社会が持っている特有の文化・産業など、見るもの全てが新鮮でした。銅山が生み出す経済的な恩恵が日本の近代化に果たした役割の大きさを知りました。また環境破壊という負の影響を完全に排除することを諦めなかった経営者の存在を知り、CSR が 100 年以上前から実践されていたことに驚きました。(1 年生)



写真 2 倉敷中央病院図書館・明治時代に欧州から購入した医学書



写真 3 江戸・明治・大正・昭和の町並みが残る倉敷美観地区



写真 4 倉敷・大原美術館前にて

「文学・絵画に描かれた名所を訪ねる」

担当教員 日原 傳

コース概要

日程	2019年9月3日、5日、10日、12日
場所	東京都23区内
参加人数	20名

コースのねらい

江戸時代の詩人や文人の作品に登場する名所、画家によって描かれた名所、また明治政府が近代国家としての体制を整えるために建てた官庁や大学などの当時における新名所を訪れます。江戸・東京の歴史を学ぶとともに文学・絵画などが名所の成立に果たした役割を考えます。

内容

1 日目 北桔橋門から皇居東御苑に入り、江戸城の本丸・二の丸・三の丸の旧跡を訪れました。つぎに皇居前広場・桜田門を経て、日比谷公園を散策。農林水産省食堂で昼食をとりました。午後は法務省旧本館を訪れ、法務史料展示室を見学しました。法務省旧本館は明治政府の官庁集中計画にもとづき明治28年（1895年）に完成した建物です。歌川広重『名所江戸百景』の「霞かせき」の絵をたよりに霞ヶ関の坂道を歩きました。かつてこの坂の南側には福岡藩



写真1 江戸城 富士見櫓

主黒田家の上屋敷が、北側には広島藩主浅野家の上屋敷があったのです。最後に旧文部省ビルを訪れ、創建当時の姿に復元された旧大臣室を見学しました。

2 日目 湯島聖堂仰高門に集合。楷樹・孔子像・入徳門・杏壇門・大成殿を見学しました。徳川幕府の教育施設である湯島聖堂は林羅山が上野忍ヶ岡の邸内に開いた家塾が起源とされ、五代将軍綱吉の時に現在の地に移りました。聖堂裏手にある神田明神・湯島天神を参拝してから、東京大学を訪れました。大学構内にある三四郎池の名称は夏目漱石の小説『三四郎』に由来するもので、正式名は育徳園心字池と言います。かつては加賀藩上屋敷の庭園の池だったのです。その後、森鷗外の小説『雁』に登場する無縁坂を下って不忍池を訪れました。上野公園では西郷隆盛の銅像・清水観音堂・上野東照宮唐門などを見学。最後に寛永寺まで歩いて解散しました。

3 日目 下町の水路を探索の一日です。はじめに芭蕉記念館を見学。つづいて隅田川沿いに歩き、小名木川が隅田川に流れ込む所にある芭蕉庵史跡展望庭園から隅田川および対岸の景色を眺めました。ついで芭蕉稲荷神社を参拝。『江戸名所図会』にはこのあたりに「芭蕉庵旧址」があったと記されています。つづいて清澄庭園を散策。深川江戸資料館では再現された江戸の町並みを体験しました。午後は深川不動尊・富岡八幡を参拝。東京海洋大学を訪れ、明治丸を見学。旧商船大学 OB の方から母校愛あふれる熱のこもった説明を受けました。この船は明治政府が英国に発注した鉄船で、明治7年竣工、翌8年に横浜に回航されました。明治天皇が明治9年に東北・北海道を巡航した際に乗船されたことで知られています。最後は相生橋を渡り、佃島の住吉神社まで歩いて解散しました。



写真2 東京大学 安田講堂



写真3 東京海洋大学 明治丸

4 日目 雷門に集合。仲見世通りを抜け、浅草寺、浅草神社を参拝。吾妻橋を渡り、牛嶋神社・三囲神社を経て長命寺を訪れました。この寺はもと常泉寺という名でしたが、徳川三代将軍家光が鷹狩に出て腹疾を得た時にこの寺の井戸水で薬を服用し、たちどころに癒えたことから「長命」という寺号を賜ったとされています。雪見の名所で、江戸末・明治の漢詩人溝口桂巖は「長命晴雪」という七絶を詠んでいます。ついで江戸の文人が遊んだ向島百花園を訪れ、秋花を賞玩。白髭橋を渡り、「投込寺」の名で知られる浄閑寺を経て、小塚原の刑場跡にある回向院を訪れました。境内には安政の大獄で刑死した吉田松陰・頼三樹三郎らの供養塔があります。最後に千住大橋を渡り、千住宿本陣跡まで歩いて解散しました。

学習を終えて

現在の東京で普段何気なく見過ごしている場所も、江戸の面影が実は残っていることを知りました。江戸の都市空間を意識することで、見える世界が変わってくることを実感しました。(1年 羽柴 航)

法務省の旧赤れんが棟は、改修に当たり、建設された時代の素材をできるだけ残す工夫がされていました。時の流れを記憶している古いものは常に人々の心を大きく動かします。見学者が直接に古い歴史と触れ合える機会は文化や伝承の保護を促進する力になると思いました。(3年 周 晏予)

「富山県の文化と自然を学ぶ：文化遺産とシアター ーオリンピックスを中心に」

担当教員 平野井ちえ子

コース概要

日程 2019年8月22日～25日

場所 富山県南砺市・砺波市・富山市

参加人数 11名

コースのねらい

利賀（南砺市）は、芸術創造による真の国際交流の場として、世界の演劇人から「演劇のメッカ」と称されています。本FSでは、観劇だけでなく、利賀とその近隣の文化と自然を学び、演劇と場の関わりについて考えます。

内容

地域と芸術の関わりについて、さまざまな角度から楽しみ考えることのできるコースです。特に2019年は、利賀ではシアターオリンピックスが開催され、例年にない規模での国際演劇祭となりました。また、井波でも4年に1度のいなみ国際木彫刻キャンプが開催され、南砺市における国際芸術交流をより広く学ぶことができました。こうした国際舞台の背景には、富山県の豊かな自然、自然と闘う人々の暮らしの歴史、県の文化行政の充実があります。訪問先には、ねいの里自然博物館、五箇山合掌造り集落、砺波散居村、リニューアルされて話題の富山県美術館なども含めました。自由行動日には、YKKセンターパーク・ますのすしミュージアム・立山パラグライダーツアーなどで体験学習を行ったり、黒部ダム探訪・トロッコ列車の旅・富山市内のミュージアム巡りなど、多彩な選択肢があります。

学習を終えて

2年連続参加した小島明華さんの感想

このFSは、観劇が好きな人や地域文化に関心がある人はもちろんのこと、何か新しい経験をしてみたいという人にもお薦めしたいです。

日常から切り離された奥深い自然の中に身を置くことで、さまざまな貴重な経験をすることができました。特に野外劇場では、虫の音や風に木の葉の擦れる音を背景に、演者の身体性エネルギーを感じることができ、普段は屋内の劇場での観劇が多い自分にとって、新鮮でわくわくする経験でした。演劇のみならず、富山の動植物に親しんだり、県を代表する美術館への訪問や五箇山での紙漉き体験など、様々な角度から地域にアプローチする楽しさも学びました。



ねいの里自然博物園での動物観察



自分だけのオリジナル手づくり和紙完成！



相倉合掌造り集落にて



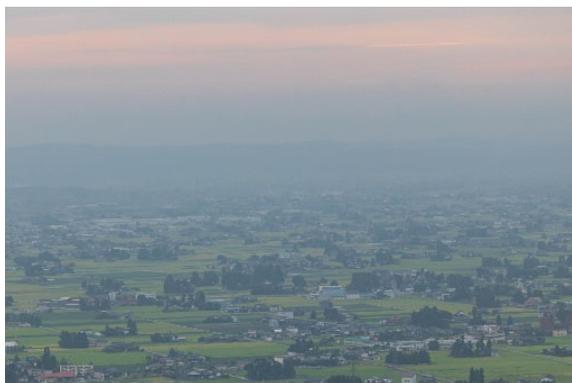
いなみ国際木彫刻キャンプでアーティストと対話



合掌造りについての現地レクチャーと紙漉き体験



終演後の利賀芸術公園野外劇場（舞台側から）



雨上がりの散居村～砺波平野



上演前の同野外劇場

「科学技術と環境

ーエネルギー、廃棄物、リサイクルを中心としてー」

担当教員 渡邊 誠

コース概要

日程 2019年8月26日、28日、29日、9月4日、5日

場所 東京都江東区、港区、大田区、神奈川県川崎市、横浜市など

参加人数 15名

コースのねらい

このフィールドスタディでは、都市における環境問題の現況を把握することを通して、政策を考察する上で必要な基礎知識や論理性、さらには思考の柔軟性を修得することを目的にしています。現場における様々な取組みを視察することにより、文系的な立場からだけではなく、理系の基礎知識とそこから生まれる発想の重要性を理解することも大切な視点です。

東京23区において排出されている廃棄物および資源物の処理、さらにはエネルギーに関わる問題について取り上げます。東京湾内の最終処分場の現況を把握し、廃棄物処理の方法についての考察やリサイクルの有効性などについて検討しています。また再生可能エネルギーのみならず化石燃料を使用した発電の諸施設を視察して、エネルギーについて環境問題の側面から考察しています。人間活動と科学技術の関連について考え、政策を模索するセンスを身に付けることも大切な目標です。

内容

(1) 事前学習会 (5月25日)

この学習会では本コースのねらいを理解した後に視察先の精査・検討を行い、以下に示されている内容で調査を進めることなどを打ち合わせました。この学習会において、廃棄物処理と最終処分、リサイクルと資源循環、水資源と水再生、再生可能エネルギーの有効性や化石燃料型発電の役割などについて様々な検討を行いました。

(2) 視察前検討会 (8月26日)

現場視察を行う前に学内教室での検討会を行い、視察内容についての論点を確認しました。国内の廃棄物やリサイクルについての一般的な統計を学習し視察内容との関連を整理しました。さらに現在行われている東京23区の廃棄物処理について、各区、清掃一部事務組合、東京都の役割を念頭に置きながら学習しました。また近年大きな問題として顕在化しているプラスチックの海洋汚染の実態や廃棄電子機器製品のもっている資源性、廃棄物輸入規制の問題などについても論点として確認しました。またこれと同時にエネルギーに関する問題も検討しました。例えば、様々な発電方式に対する二

酸化炭素排出量の統計、各種発電方式に対する電力供給量比（ミックス）とCO₂排出係数との関係およびその変動などについて学習しました。

(3) 1日目（8月28日）の視察内容 —東京都環境公社の見学会に参加—

- ・港清掃工場（廃棄物の焼却過程とごみ発電、飛灰等の処理、環境基準とその対応）
- ・東京都環境局中坊合同庁舎（東京23区の廃棄物処理・最終処分の歴史と現在の状況など）
- ・中央防波堤外側埋立処分場（最終処分場の見学と拡張工事の視察、残余年数などの調査）

(4) 2日目（8月29日）の視察内容 —東京都環境公社の見学会に参加—

- ・(株)高俊興業（建設混合廃棄物処理施設の見学と循環型社会の考察）
- ・(株)リーテム（廃情報機類等リサイクル施設の見学と再資源化問題の検討）
- ・(株)中間貯蔵・環境安全事業（PCB廃棄物処理施設の視察、科学技術と社会の関係性の考察）

(5) 3日目（9月4日）の視察内容

- ・川崎市浮島太陽光発電所（メガソーラの見学と再生可能エネルギーの検討、再資源化施設等の視察）
- ・森ヶ崎水再生センター（水再生施設と発電システム等の見学、中水利用と水資源についての考察）

(6) 4日目（9月5日）の視察内容

- ・(株)J-Power 磯子火力発電所（発電施設の視察）
- ・パソナ大手町牧場（室内牧場等の見学）

(7) 事後学習会（9月13日）

事前検討会と4日間の視察内容を振り返り、参加者全員で意見交換を行いました。例えば、廃棄物の焼却処理のローカルなメリット（最終処分量削減）とグローバルなデメリット（炭素等放出）をどのように考えるか？リサイクルの有効性を熱力学の視点から考えるとどのようになるのか？科学技術の進歩とは何だろうか？などについて考察しました。環境問題を考察しその観点を含めて社会の持続可能性を検討するためには、「地球システム」の概念と「人間活動（人為）」および「自然法則」の特徴を理解することが必要であることが理解されました。

学習を終えて

このフィールドスタディに参加して、廃棄物、エネルギー問題などの科学技術の進歩が抱える問題を、見学を通して学びました。これらの問題を考えることは今後数十年後の社会を考えることであり、一人ひとりが環境問題を意識する大切さを実感しました。また、今回は首都圏だけを見てきましたが、他の地域と比較することでそれぞれに合う持続可能な社会のあり方を考えるきっかけになりました。

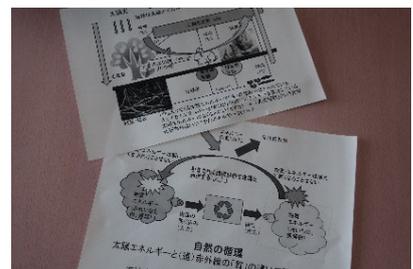
(3年 石橋拓人)



東京湾防波堤外側埋立地の様子



廃棄物の発生から最終処分までの流れについて考えました



視察前の検討会も1日追加されました

「環境・福祉・文化のサステナビリティと ハワイアンスタディーズ」

担当教員 西城戸誠 佐伯英子

コース概要

日程 2019年9月2日～11日

場所 米国ハワイ州（オアフ島、ハワイ島）

参加人数 10名

コースのねらい

ハワイは日本人にとって最も身近な外国です。しかし、このフィールドスタディでは「観光では絶対にわからないハワイ」を体感します。オアフ島とハワイ島を舞台に、環境・福祉・文化のサステナビリティとそこに通底するハワイアンスタディーズとの関連を学び、多角的にハワイ社会を理解し、そこから逆照射される現在の日本や「私」を考えます。

内容

1日目(9/2) オアフ島・ホノルルに到着後、オアフ島北部のワイメア溪谷に行き、ハワイ古代の土地所有制度であるアププアアの内容や、ハワイの人々の自然の学び方を通して、ハワイの生態系保全とハワイ文化との関係について、自然科学だけが「科学」ではない文化と融合した科学観を学びました。

2日目(9/3) ハワイ大学マノア校で、タロイモ畑での農作業を通じて、タロイモ栽培とハワイ文化の関連について学習しました。また、ハワイ大学イーストウェストセンターの見学と、環境リーダーシップ教育の講義を受け、3つの Thinking (Logical, Critical, Design) の考え方を学びました。

3日目(9/4) 午前中はCamp Palehua で元牧場の場所では在来種を植樹する活動を見学しました。Palehuaからはコオリナ・リゾートを見ることができ、同じアププアアの上流と下流で正反対の活動が行われていることに、ハワイ文化と開発の共存共栄の難しさも見て取れます。次に Kookia Kakihi Valley では、多様な移民が居住し、貧困家庭が相対的に多い地区での福祉、医療活動の現場について学びました。最後にハワイ浄土宗本院を訪問し、ハワイと日本の仏教との関係について学びました。

4日目(9/5) 午前中はワイキキにおける観光の実態を視察した後、1970年代のハワイアンルネッサンス(文芸復興)の動きの象徴となるホクレア号についての説明をポリネシア航海協会の方から受け、またホクレア号の乗船とその後ワークショップを実施しました。



ワイメア溪谷でのレクチャー



タロイモ畑を前にして学習



在来種の植林について学ぶ



ホクレア号に関する講義

5日目 (9/6) オアフ島からハワイ島に移動した後、イミロア天文台を訪問しました。プラネタニウム、球状のプロジェクターなど最先端の技術を使った説明によって、ホクレア号の航海術で不可欠な星座の話や、ハワイの火山の歴史と神話を学びました。

6日目 (9/7) **Hawaiian Crown Plantation** を訪問しました。まずはバナナとカカオの農園を訪問し、カカオ豆の生産工程、チョコレート工場の見学を行い、ハワイ島における農業の六次産業化の最先端の動向を学ぶことができました。また、ファーマーズマーケットの見学、**Hawaiian Crown Plantation** のガイドをくださった農家の方の個人の農園も訪問し、ハワイの農業について理解を深めました。

7日目 (9/8) 2018年5月にキラウエア火山が噴火しましたが、噴火被災地の一つ **Pahoa** 地区を訪問し、大地が生まれる場所の最前線を体感しました。その後、ハワイ文化センターを訪問しハワイ島における日系人の歴史について、ヒロ地区のカメハメハ大王の前で、津波と地域の歴史についての話を伺いました。

8日目 (9/9) キラウエア火山公園のサイレントウォークの後、マウナケアで問題になっている **TMT** に対する抗議の現場を訪問しました。単なる政治対立ではなく、**Kapu Aloha** という **Aloha** の心を持ち、非暴力、平和的解決、祈りと愛をもった、ポジティブなキャンペーンであることが理解できました。

9日目 (9/10) フィールドスタディ最後のプログラムは、ハワイ島在住でフラの講師をされている日本人女性の方に、**Kuleana (responsibility)** に関する講義をしていただきました。「あなたにとってのクレアナは？」という問いかけは、ハワイの自然と文化の関わり、ハワイに住む人々、ハワイ社会の多様性を理解し、そこから逆照射される現在の日本や、自分自身を見つめ直すという、このフィールドスタディの目的に合致したものでした。



イミロア天文台における講義



カカオとバナナ畑での学習



噴火被災地への訪問



Kuleana を学んで

学習を終えて

私はこのハワイフィールドスタディに参加して観光で行くハワイでは感じることのできないハワイアン の価値観を学習することができた。オハナ、つまり家族や地域、さらに何世代も後の"未来"の人々の事を考えて行動することがハワイアンの価値観である。そして、様々な場所を訪問してその価値観の原動力はハワイアンが大切に築きあげてきた文化にあることに気づいた。私はこのフィールドスタディにおいて持続可能な社会を実現するための1つの方法としてそのような価値観、そしてそれに必要な文化が重要であると学んだ。今後この価値を日本でも実践し、多くの人が文化を大切にしていけるように私にできることを考え続けていきたい。(2年 森 裕香)

ハワイ島とオアフ島の2つの島を訪れ、そこに暮らす方々との交流を通し、ハワイと日本の考え方の違いや文化の違いなどを感じることが出来ました。またタロイモ畑での農業体験、伝統技術を駆使したホクレア号への乗船などの貴重な体験の数々をさせていただく中で、ハワイのコミュニティや次世代のことを大切にするという考え方を節々で感じたことが大変印象深かったです。ハワイのどのような思考や文化が、持続的な循環型の社会の構築を成り立たせているのかを学ぶことが出来た10日間でした。これからの学びに役立てたいです。(2年 門田 渚)